廃材を利用した図画工作科授業の学習評価と指導法について

尾崎　公彦[*1]　中村　俊介[*2]

要　　旨

図画工作の授業は，教材研究をはじめ事前準備が重要である．教師自ら試作を行い，制作過程でどのような思いを抱いたのか，どのような点を苦心したのか，完成した時の達成感はどうだったのかを理解するために教材研究を行う必要がある．それは一人一人の児童の制作活動を見極め，どの程度関わるべきか，どの程度指示をするのか，どれだけ手助けするのか，どこに焦点を当てるのか，など個別対応の準備となる．しかし，図画工作の指導に対して苦手意識を抱いている教師は少なくない．こうした現状では，児童の造形表現活動を円滑に指導することは困難であると想定される．教師が図画工作科の学びは制作過程にあり，上手く作ることや上手く描くことが図画工作の指導の目的ではないことを再確認し，児童一人一人の頑張りや想いを理解し，主体的で対話的で深い学びにつながる図画工作の学習評価と指導法について考察する．

Keywords：図画工作，学習評価，指導法，授業計画
arts and crafts, learning assessment, instruction method, lesson plan

1. 問題

図画工作の授業は，教材研究を含み事前準備が重要である．教師が自ら試作を行い，どのような思いを抱いたのか，どのような点を苦心したのか，完成した時の達成感はどうだったのかを理解するために教材研究を行う必要がある．教材研究は，一人一人の児童の制作活動を見極め，どの程度関わるべきか，どの程度指示をするのか，どれだけ手助けするのか，どこに焦点を当てるのか，など個別対応への準備ともなる．しかし，現状では，他の教科の準備や学級運営などで，十分な図画工作科の教材研究の時間が確保できない等，様々な課題が想定される．しかし図画工作科の専門的知識や実践力や造形的な視点を獲得するためには，自ら形や色について楽しみながら理解を深める実践を行うことが有効である．図画工作の指導に不安を抱える教師が，授業時に，児童の思いを理解し，共に形や色の組み合わせに気づき， 表したいことを考え， 表したいことを見つけることができる指導法や学習評価について，廃材を利用した図画工作の授業展開から考察する．そして，一人でも多くの教師が図画工作の指導に対して苦手意識を払拭し，前向きな気持ちで図画工作の授業に取り組める一助になることを期待する．

2. 方法

第一筆者が実践している児童発達支援センターでのアート活動の事例を基に，小学校第

[*1] 川崎医療福祉大学　医療福祉学部　子ども医療福祉学科
[*2] 川崎医療福祉大学　医療福祉マネジメント学部　医療福祉デザイン学科

1 学年及び第 2 学年を対象とし，インクルーシブ教育を前提に授業「廃材を利用したトロフィーつくり」を実践すると仮定し，その制作過程において児童一人一人の思いや頑張りを理解し，育成を目指す資質・能力の三つの柱である「知識及び技能」・「思考力，判断力，表現力」・「学びに向かう力，人間性等」から，観点別評価や個人内評価に有効な学習評価と指導法を考察する．

2.1 授業計画　内容と目標

「廃材を利用したトロフィーつくり」

本題材は新しい小学校学習指導要領（平成 29 年 3 月 31 日告示）解説図画工作編 [1]の第 1 学年及び 2 学年の目標（2）「造形的な面白さや楽しさ，表したいこと，表し方などについて考え，楽しく発想や構想したり，身の回りの作品などから自分の見方や感じ方を広げたりすることができるようにする．」（p.35）に基づいている．また，内容の「A 表現」（1）イ「絵や立体，工作に表す活動を通して，感じたこと，想像したことから，表したいことを見付けることや，好きな形や色を選んだり，いろいろな形や色を考えたりしながら，どのように表すかについて考えること．」（p.38）や「A 表現」（2）イ「絵や立体，工作に表す活動を通して，身近で扱いやすい材料や用具に慣れるとともに，手や体全体の感覚などを働かせ，表したいことを基に表し方を工夫して表すこと．」（p.43）[共通事項](1)ア「自分の感覚や行為を通して，形や色などに気付くこと．」（p.53)（1）イ「形や色などを基に，自分のイメージを持つこと．」（p.53)に重点をおいている．

対象学年：小学校第 1 学年及び第 2 学年

内容：「廃材を利用したトロフィーつくり」　授業時間：6 時間

目標：

（1）**「知識・技能」**：自分の感覚や行為を通じて，形や色などの組み合わせによる感じがわかる．

（2）**「思考・判断・表現」**：材料や素材を組み合わせたりして，感じたことや想像したことから，表したいことを見つけ，形や色などを生かしながら，どのように表すかについて考える．

（3）**「主体的に学習に取り組む態度」**：進んで材料を加工して組みわせたりして，紙筒に表したり，鑑賞したりする活動に取り組み，作りだす喜びを味わうとともに，形や色などに関わり楽しく豊かな生活を想像しようとする．

材料・用具：紙筒，発泡スチロール球（各種），色画用紙（各色），紙テープ（各色），毛糸（各色），マスキングテープ（各種），シール（各色），テープ芯材（各種），はさみ，のり，セロハンテープ，クレヨン，パス

上記目標から図画工作科は上手に作品を作ったり，上手に絵を描いたりすることを目標としていないことは明らかである．児童一人一人が材料と向き合い，表したいことや表し方を見つけ出し，試してみることで，新たな視点を獲得し次への意欲を生み出すことが目標となる科目である．つまり教師は，制作過程で生じる様々な問題について，児童が主体的に取

り組み問題解決をしながら制作を進めていることを理解する必要がある．教師は，児童の頑張りに寄り添いながら，新たな視点や意味を獲得できる，言葉掛けや環境構成を行わなければならない．

2.2 内容と目標からの環境構成

小学校学習指導要領（平成 29 年 3 月 31 日告示）解説図画工作編[1]には，児童が興味や関心を持ち主体的に取り組めることができるよう題材を，教師の創意工夫を生かして設定し，児童の資質・能力を育成するこが大切であると記されている（p.24）．児童が主体的に取り組みたいと思えるような，教材を準備し，　児童が題材に対して面白そうだ，やってみようと主体的に取り組めることが望ましい．教師は創意工夫をし，教材を適切に準備し環境構成することで，児童は自然と制作に取り組むことができる．

環境構成として以下のことがあげられる．

（1）紙を手とハサミでの基本的な加工についてサンプルを提示する．
　手で折る（図 1），手で破く（図 2），ハサミで切る（図 3），紙を揉む・破り取る（図 4）など自ら組み合わせを考え，表したいことが見つけられるようにする．

（2）基本形となる紙筒からの展開についてサンプルを示す．　材料別に整理して容器に入れ，使うことを促す環境構成をする（図 5）．

（3）制作過程を可視化する．

（4）友達の制作過程を自然に見ることができるように環境構成する．

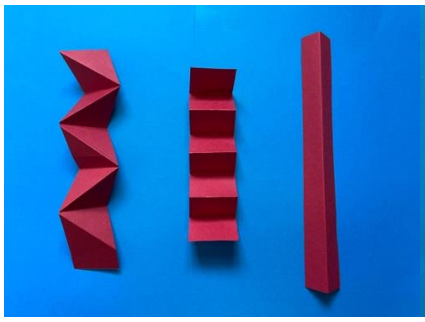

図 1　手で折る

図 2　手で破く

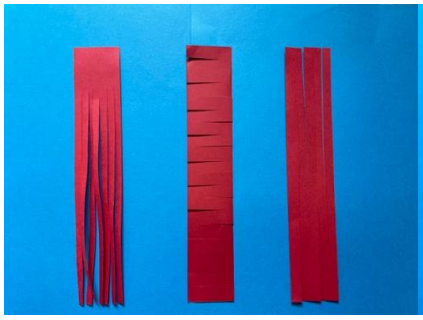

図 3　ハサミで切る

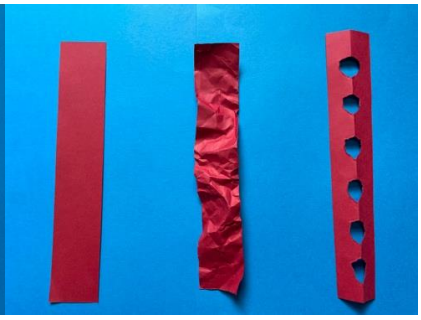

図 4　紙を揉む・破り取る

図 5　材料と基本形

制作過程において全ての児童が，材料と対話し，表したいことや表し方を見つけ，主体的に取り組める指導法が求められる．教師の過度な支援や放任は，想像的解釈の妨げになる．教師には，児童が自由に伸び伸びと取り組める環境を担保し，児童一人一人をよく観察し，その上で必要最低限の支援が求められる．図画工作科の目標は，上手に作品を作ったり，上手に絵を描いたりすることではない．そして，その特性から，書き方や算数の授業とは異なり，一人一人の想像的解釈で行われるため唯一の正解はない．図画工作科の授業成果は，全員が違うものを制作することにあるとも教師は理解しておく必要がある．

児童が表したいことを考える，見つけるために，材料を自由に使用できる環境を整備し提供することは言うまでもない．材料の使用に際して，安全性以外は口出しをせず，勿体無いなどの言葉は厳禁である．ハサミや接着剤などの用具については，第 1 学年及び第 2 学年が対象であることを考慮し，使用方法や保管について，イラストや写真で可視化するなどの配慮が必要である．

2.3 制作過程の指導

制作過程の指導については，教師が教え，児童が学ぶといった構図ではなく，双方向の関係性が望ましい．教師も児童から学び，児童も教師から学ぶ，児童同士で学び合うといった関係性を教師が構築する必要がある．児童が自由で伸び伸びと主体的に取り組むためには，制作過程の指導に関する留意点は以下のことが考えられる．

(1) 教師は児童の思いや考えを否定せず，受け止めること．
(2) 教師は児童に質問し，制作過程に感じたことや考えたことを言語化させること．
(3) 教師は児童の新たな視点の獲得のきっかけを作る立場に徹すること．

教師の否定的な言動は，児童の柔軟な発想の妨げになるばかりか，作ることへの意欲を削ぐことになる．制作過程で感じたことや考えたことを言語化させることは，客観的に自分の思いを振り返ることに有効である．主体的に取り組むのは児童である．教師はあくまで支援者に徹する．こうした児童と教師の関係性を構築することを前提に，筆者らが考案した，児童用「ずがこうさくノート」を教師用に再開発し，それを活用した指導法と学習評価について次節で考察する．

3. 教師用ずがこうさくノートを活用した指導法と学習評価

教師用「ずがこうさくノート」(図 6) は，上記の制作過程の指導に関する留意点を基に，児童への質問項目を主とし構成開発する．授業時に児童一人一人の想いを理解し，図画工作の学習評価や有効な指導法に寄与することが期待できる． 児童への質問は，観点別学習状況の評価では示しきれない，児童一人一人の頑張りや良い点や可能性について評価する個人内評価の内容とする．

教師は，児童一人一人の制作過程をデジタルカメラで記録し，児童用「ずがこうさくノート」に言語化された内容と，教師自らが質問した内容を教師用「ずがこうさくノート」にまとめる．制作過程を可視化することで，児童一人一人の頑張りや，獲得した視点などが客観的に理解できる．制作過程をデジタルカメラで記録することで些細な頑張りも見逃すことが無くなる．図画工作の指導に不安を抱いている教師にとって，このノートは，児童一人一人の活動を客観的に見ることができ，児童の思いを理解できる一助になる．授業の冒頭や途中に映像で児童に見せることも有効であると考える．

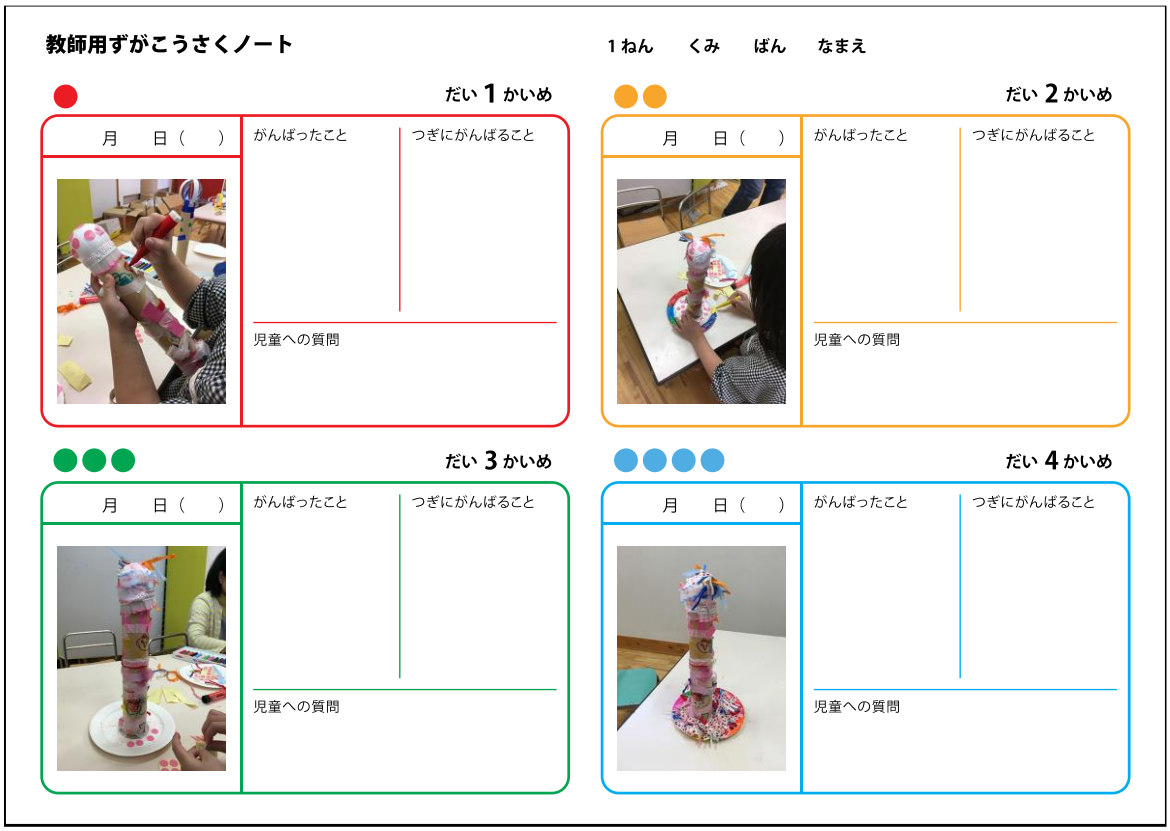

図 6　教師用ずがこうさくノート

また「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料 [2)]には学習評価の改善の基本的方向性が以下の通り示されている（p5）．

(1) 児童生徒の学習改善につながるものにしていくこと

(2) 教師の指導改善につながるものにしていくこと

(3) これまで慣行として行われてきたことでも，必要性･妥当性が認められないものは見直していくこと

この学習評価の改善の基本的方向性を理解し，より良い授業のための指導法や学習内容の改善を行えるようになるために，教師用「ずがこうさくノート」を活用し，客観的視点を持って，授業内容や自らの指導について振り返ることが大切である．

4. 考察

本研究では，児童一人一人の頑張りや想いを理解し，主体的で対話的で深い学びにつながる図画工作科の学習評価と指導法について考察してきた．図画工作科の指導をする教師は，その学びは制作過程にあり，上手く作ることや上手く描くことが図画工作の指導の目的ではないことを認識する必要がある．しかし現状では，図画工作の指導に対して苦手意識を抱いている教師も多く，他の教科の準備や学級運営などで，十分な図画工作科の教材研究の時間が確保できない等，様々な課題が想定される．図画工作科の学びは，児童一人一人が自らのやり方で取り組むことを容認する．その答えは一人一人の想像的解釈で導き出される．教師は，児童の頑張りや想いを理解し，主体的で対話的で深い学びにつながる図画工作の授業を展開しなければ， 図画工作科の目標は達成されないばかりか，図画工作を嫌いになる児童をつくり出しかねない．

児童の思いと質問したことに対する答えと制作過程の画像を，教師用「ずがこうさくノート」に記録しまとめ ICT を活用し，今まで振り返ることが無かった制作過程を記録することで，児童も客観的に自分の頑張りや友人の頑張りを確認できる．それは，見る行為を通じて，作品の良さや美しさを感じ取ったり，考えたりすることに繋がり，自分の見方や感じ方を深め，次への意欲を作ることにもなる．

図画工作科の目標を達成するために教師が教え導くのでは無く，教師は，共に悩み共に喜び，作る過程を共に楽しむことが結果として目標を達成するのである．図画工作科の指導においては， 他の科目と異なることを認識し，教師自体の意識を変える必要性がある．こうした記録は， 図画工作の題材を丁寧に省察することにも繋がり，児童一人一人の頑張りや想いを理解し， 主体的で対話的で深い学びにつながる図画工作の学習評価と指導法を生み出すと考える．

引用文献

1）文部科学省，小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 図学工作編，四版，日本文教出版，大阪，2021

2) 文部科学省 国立教育政策研究所，「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料 WEB 版　小学校　図画工作，2020
https://www.nier.go.jp/kaihatsu/pdf/hyouka/r020326_pri_zugak.pdf

参考文献

日本造形教育研究会，みんなおいでよ　ずがこうさく 1・2 上下，開隆堂出版株式会社，東京，2019